

大きな巨人と小さな町

姫
兵士
乳母

姫

じゃあ、これから、お芝居を始めていこうと思います。その前に、ちょっとみんなに手伝って欲しいことがあります。この舞台の上に、一本の線を引きたいんです。誰か手伝ってくれる人はいますか？…ありがとう。じゃあ上がってきてくれるかな。(線を引く) じゃあ、お父さんお母さんのところに戻るうね。…はい、ここに、一本の線が引けました。これは、壁です。…壁。見えないけどね。本当にあつたら、お芝居が見えなくなっちゃうからね。ここには大きな壁があると思ってください。

そう、これから始まるお話は、大きな壁がある小さな町の物語です。この町には、一人のお姫様が暮らしていました。…えーって言わない。そのお姫様には、お姫様を守る兵士がいて、そしてお姫様の世話をするばあやが…。

乳母(声)

姫

ばあやはやめて！

…お姉さんがいました。この町に住んでいるのは、これだけでした。そう、たった三人でした。…変だよね。たった三人しかいないだもんね。でも三人は、この大きな壁のある小さな町で、なに不自由なく暮らしていました。だから壁があることなんか気にしていなかったし、時には壁があることすら忘れていました。…でも、なんでこの町には壁があるんだろう？それはこのお話をお終いまで聞いてから、考えてみることにしましょう。

ドシーンという大きな音が聞こえて来る。

姫

…そうそう。大事なことを言うのを忘れていました。この町の外には、それはそれは恐ろしい…巨人がいたんです。

乳母、兵士、駆け込んで来る。

乳母
姫

きゃーっ！きゃーっ！きゃーっ！
うるさーいっ！

兵士

巨人よ！巨人がきたのよ！きゃーっ！

姫！お下がりにください！…ええい、巨人め！今日という今日はこの私が退治してくれよう。うりゃーっ！

ドシーン！

兵士 うわーっ！…む、無念…ガクッ。
乳母 あんた、大丈夫！？しっかりして！

乳母、駆け寄って介抱する。

姫 ……とに、うっさいわね。ちょっと行ってぶっ飛ばしてこよつかしら。
乳母 姫さま、なりません！危のうございますわ！
姫 だって、うるさいでしょ！
乳母 踏みつぶされてしまいますよ！あの巨人ときたら、たった一踏みで町ごと踏みつぶしてしまうんですから。
姫 だったら、どこにいたっていつしよじゃない。
乳母 いいえ！姫さまだけは、あたくしがなんとしてもお守りいたします。

ドシーン！

兵士 ……こうなったら、奥の手を出すしかないな。
乳母 奥の手！？
兵士 レーザービームです。

乳母と兵士、姫の髪の毛を持って構える。

兵士 レーザービーム、ファイアー！
三人 ビビビビビ…！

ドシーン！

三人 うわー！
兵士 ちくしょう！ダメか！
姫 何やらせんのだよ！

姫、二人を殴る。

二人 姫 恥ずかしいことやらせないで。
すいません。

ドシーン！

みんな うわーっ！

巨人、去って行く。

行っちゃった…。

ああ、よかった…。

あー、つかれた…。

乳母、姫に駆け寄って、

乳母 姫さま、どこかお怪我はありませんか？具合の悪いところは？…まあ！お着物がこんなに汚れて！

姫 だから、いいわよ、別に。

乳母 いけません！姫さまは、姫さまですよ。

姫 だって、誰かに見せるわけじゃなし…。

乳母 いいえ！お着物の汚れは、心の汚れ。美しくしなくてはなりません。

兵士 いや、お前、なにもそこまで…。

乳母 おだまり！

姫 ばあや。

乳母 ばあやはやめて！

乳母はバタバタと姫の世話を焼く。

姫 それにしてもあの巨人。なんなの？めっちゃウザいんだけど。

乳母 ええ、ええ、お気持ちはお察しいたしますわ。次こそは必ずやつつけてご覧にいきますから。

姫 あんたが？

乳母 (兵士を指して) この人が。

兵士 おい！

乳母 もうビシッとやってバシッとやってグッチャグッチャにして…ミンチにしたあげく、巨人鍋にしてくれるわ！ガッハッハッ…。

二人 ……。

乳母 …あら、あたくしとしたことがはしたない。(咳払い)とにかく、姫さまはどうぞお心安らかに…。

二人 …分かった。あたしがやる。

姫 姫さま！？

二人 もうあんなたちなんかに任せておけないわ。あんな迷惑なヤツ、あたしの手で成敗してやる。

兵士 ちょ、ちょっと、姫さま、落ち着いて！

乳母 姫さま…あたくしどものために御自ら戦場に向かおうとは、なんと勇ましい…。

姫 いや、別にあんなのためじゃ…。

乳母
兵士
乳母

(遮って) あたくし感激で言葉もございませんわ。
おいおい…。
でもなりませんわ。あの巨人は、たった一踏みで町を丸ごと踏みつぶすよ
うな恐ろしい巨体の持ち主…。通りすがりに踏みつぶされていった町を、
あたくしいくつ目にしたことか…。それなのに、ああ、それなのに、あの
巨人はあたくしたちが踏みつぶされたことさえ気づいていないのです。ヨ
ヨヨ…。

姫と兵士、もらい泣き。

二人
乳母
姫
二人

ばあや…。
ばあやはやめて…。
でも、心配いらないわよ。あたし、こう見えても強いから。
(感激して) 姫さま…。
よし、巨人め！どっからでもかかってこーい！

シーン…。

三人、壁を見上げる。

姫
乳母
二人
兵士

…で、どうやって戦ったらいいんだろ？
なにやったっていいんですよ。相手は巨人ですから。
巨人だもんね。
もうビシッとやってバシッとやってグッチャグッチャにして…巨人ハ
ンバーグにしてくれるわ！ガツハツハツ…。
食いたくねえなあ…。

二人、笑う。

姫、ふと考えて、

そういえばさ、巨人って、どんなヤツなんだろ？
と、申しますと？

いつも壁の向こうにいるしさ、雲よりでかいからよく見えないんだよね。
なんか、とりあえず戦ってる、みたいな…。

…。
あんたたち、知ってる？どんくらいでかいの？顔、見たことある？やっぱ
ガオーッ！とか、グワァッ！って感じ？

姫さま。

なによ、それも教えてくれないの？いじわる。…あ、知らないんだ。そー
か、知らないんだ。なーんだ、だれも巨人の正体も知らないんだ。それじ
ややっつけられないよねえ。

姫、笑う。

やっつける方法なら、ありますよ。

え！？

あんた。

実はこの町には、昔から巨人を倒すための武器が眠っているのです。

どこに？

そこに。

兵士が指差す先には、小さな箱がある。

…これ？

はい。

こんな小さいの？

はい。

どれどれ…。

姫、箱を開けようとする。

が、箱は開かない。

姫、だんだんムキになる。

ぬあーっ！

姫さま！

なにこれ！？ぜんっぜん、開かないんだけど！

…ええ。

なめてるわね。あいつさえやっつけられたら、壁の向こうにだってけるのに。

ヒヤーツ！

乳母、ぶっ倒れる。

なに！？なに！？どうしたの！？

姫さま…今、なんと…。

いやだから、壁の向こうに…。

ヒヤーツ！

乳母、ぶっ倒れる。

おい、ばあや、しっかりしろ！

ばあやはやめて！

兵士
乳母

姫
乳母

姫
乳母
兵士
姫

姫
兵士
兵士
姫

兵士
姫
兵士
乳母
姫
兵士

乳母、起き上がる。

乳母 姫さま、恐ろしいことを言わないでくださいませ。あたくし、心臓が止まるかと思いましたわ。

姫 何、なんか変なこと言ったっけ？ただ、壁の向こうに…。
乳母 ヒヤーツ！

乳母、ぶっ倒れる。

兵士 ばあやーっ！

だからばあやはやめてって言ってんでしょ！

乳母、兵士を蹴り飛ばす。

乳母 いいですか、姫さま。姫さまは壁の外がどんなに恐ろしいところかご存知ないからそんなことを軽々しく口にできるのです。

え、なに？どういうこと？

乳母 この壁の向こうには、あの巨人だけじゃなくて、もっともつと恐ろしいものがたくさんあるのです。

もっと恐ろしいもの？

姫 そうです。それはもう身の毛のよだつような者たちが…。

(興味をそそられて) たとえばたとえば？

乳母 (ヒソヒソ) とか！

キヤーツ！

乳母 (ヒソヒソ) とか！

イヤーツ！

姫 (ヒソヒソ) とか！

死んじゃうーっ！

兵士 (呆れて) おいおい…。

乳母 ですから！壁の向こうのことなんか、もう二度と口にしないでくださいませ！

せ！

姫 いや、そんな怒りなくなつて…。ほら、全然考えてみたこともなかったし、

ちよつとのぞいてみたいなあ、くらいな、さ…。

乳母 ダメです！出るのものぞくのも聞き耳立てるのも、ゼーンぶダメです！

姫 分かったわよ…。

乳母 外の世界に関わってはなりませんよ。(兵士に) …あんたも！余計なこと吹

き込むんじゃないわよ！

兵士 ハイハイ…。

乳母 じゃ、お洗濯してきましょう。姫さま、ごきげんよう。

乳母、去る。

姫
すっかり、そうかあ……。考えたこともなかったけど、そうか、この壁の向こうには、別の世界があるんだ。
……。

姫、兵士を見る。

平氏はいやな予感がして、目をそらす。

物言いたげに兵士を見続ける姫。

兵士、根負けして、

兵士
……なんですか。

姫
余計なこと……吹き込むんじゃないわよって。

兵士
ええ、言ってみましたね。

姫
余計なこと。

兵士
……。

姫
ねえ、余計なこと。

兵士
分かった、分かりました！何が聞きたいんですか！

姫
やっぱり知ってるんだ。外の世界のこと。

兵士
……ずいぶん、昔のことです。

姫
それでもいいよ。教えてよ。

兵士、ため息をついて、やがて話し出す。

兵士
この壁の向こうには、かつて大きな国がありました。

姫
大きな国？

兵士
はい。その大きな国の中には、たくさんの小さな町があって、みんな一緒に暮らしていたんです。その頃はこんな壁なんかなくて、小さな町と町は互に行き交い、助け合って暮らしていました。でも、ある時、不思議なことが起こったのです。

姫
不思議なこと？

兵士
その大きな国がもっともっと大きくなって、そこに住む人がもっともっと多くなっていくにつれて、だんだんと……人の姿が見えなくなっていったのです。

姫
見えなく？

兵士
はい。そして、気がついた時には、壁がありました。

姫
……。

兵士
壁がどうやってできたのか、だれが作ったのか、何も分かりません。そしてそれ以来、壁の向こうのことは分からなくなりました。分かっているのは、恐ろしい巨人がうろついていると言うことだけ。その大きな国が今もあるのか、壁の向こうにだれがいるのか、いないのか……。もう、何も分からないんです。

姫 どうしてみんな、壁の向こうに行かないんだろう。
兵士 必要ないからです。

姫 必要ない？

兵士 壁の中にも生きていけます。壁の中ですべて事足りるなら、外に出る必要もない。なにが起るか分からないのに、見知らぬものに出会う必要もない。誰かと会う必要もない。

姫 ……。

兵士 そうやって、私たちは生きてきたのです。

間

兵士 行きたいですか？

姫 え？

兵士 壁の向こうに。

姫 …分らない。怖い気もするし、知りたい気もする。

兵士 ……。

姫 どうしたら行けるかな？

兵士 わかりません。…でもひよっとすると、いつか巨人が、壁を壊してくれるかもしれない。

姫 巨人が？

兵士 はい。

姫 どうやって？だって、こーんなでっかいんでしょ？町ごと踏みつぶされちゃうんでしょ？その微妙なコントロール、無理じゃね？危なくね？

兵士 巨人にだって、いろいろいるんですよ。…では。

兵士、去る。

姫 巨人にも、いろいろいる…。

ドシーン、ドシーン…。

姫 そうか、巨人は一人じゃないんだ。じゃ、ますます巨人って…なに？

姫、壁を見上げている。

数日後。

姫 うおりゃーっ！

姫、壁に立ち向かう。

兵士、出てきてそれを見ている。

姫 ハアハア…。
兵士 …なに、してるんです？
姫 うわ！見てた！
兵士 そりゃ、見てますよ。それが仕事ですから…。でも、無理だと思いますよ。
姫 なにが？
兵士 ですから、それ。
姫 それ？
兵士 それ。
姫 ああ、壁を壊すこと…。
兵士 わーっ！

兵士、あわてて姫の口を塞ぐ。

姫 モゴモゴモゴ…（振り払って）なにすんのよ！
兵士 ばあやに聞こえたら、大変ですよ！
姫 大丈夫よ。今日は買い物に行つて、しばらく帰つてこないもの。
兵士 ばあやをなめちゃいけません。あの地獄耳は世界の果てからだつて聞きつ
けますよ。壁を壊す、なんて言葉がちよつとでも耳をかすめただけで…。
ばあや ひゃーっ！

ばあや、出てきてぶつ倒れる。

ばあや あんたたち、なんか言った？

二人、首を振る。

ばあや やあねえ、もう年かしら。

ばあや、去る。

兵士 …あの有り様なんですから。
姫 ふーん。
兵士 ふーん、じゃなくて…。
姫 ねえ、手伝つて！
兵士 は？
姫 この壁、思った以上に分厚いのよね。なかなか壊れなくつて。ちよつと手
伝つて。
兵士 人の話聞いてます？
姫 いいから！

二人、がんばる。

がんばってるうちに、プロレスごっこになる。

姫 だめねえ…。じゃ、今度はちょっと、登ってみよう。

兵士 まだやるんですか！

姫 早く！

二人、がんばる。

がんばってるうちに、プロレスごっこになる。

姫 だめねえ…。じゃ、今度は端まで行ってみよう。

兵士 まじですか！？

姫 よーい、ドン！

二人、走る。

走ってるうちに、元の場所まで戻ってくる。

ばあやがいるが、二人、気づかない。

二人

ハアハア…。

姫 ちくしょーっ！

姫、暴れ出す。

姫 なんなの、これ！なんなの！？ねえ、なんなの！？

兵士 だから無理なんですって。もうやめましょーよ。ばあやだって、そろそろ

帰ってきますよ。見つかったら大変なこと…。

ばあや …だれに何がバレたら大変なんだって？

二人 出たーっ！ばあやだ！

ばあや ばあやはやめてって言うてるでしょ！

姫、逃げる。

ばあや、追いかける。

兵士、姫を応援している。

兵士 姫さま、危ない！速く！もっと速く！

ばあや、兵士に跳び蹴りする。

ばあや あんたも！余計なこと言うなって言ったでしょう！

兵士 す、すいません…。

ばあや まったく、油断も隙もあったもんじゃない…。姫さま！

姫 はい！

ばあや 壁の向こうは恐ろしいところだと言ったはずです。ダメ！ぜーったいにダメ！分かりました？

姫 はい！

ばあや ……まったく、返事だけはいいんだから。

ばあや、箱を持ってきて置く。

姫 なにそれ？何買ってきたの？

ばあや 秘密の箱です。

姫 秘密の箱？

ばあや 絶対に開けちゃいけませんよ。

姫 はい。

ばあや いいですか、絶対ですよ。

姫 はい。

ばあや、去る。

姫、すぐに箱を開ける。

兵士 ちょ、ちょっと…！

中から、「ハズレ」と書かれた紙が出てくる。

ばあや、出てくる。

ばあや ……。

姫 ……。

ばあや あたくし、先ほどなんと言いました？

姫 開けちゃダメって。

ばあや ……。

姫 ……。

ばあや、ため息をつくとき、また箱を持ってくる。

ばあや 開けちゃダメですよ。

はい。

ばあや、行きかけて、振り返る。
だるまさんがころんだみたいに。

姫 ……。

ばあや、去る。

姫、箱のところに行く。

兵士

ちょっと。

姫

しっしっ！あんたもどっか行って！

兵士

怒られますって。やめましょよ。

姫

だから、知らなかったことにすればいいじゃない。

兵士

そうはいきませんって。

姫

いいから離しなさいよ。

箱をとりあって、二人、戦う。

姫、勝つ。

姫

よっしやーっ！

兵士

ちくしょーっ！

姫

敗者は去るのみ。行きなさい！

兵士

ほんと、知りませんからね！

兵士、去る。

姫、箱を開ける。

中から、鏡が出てくる。

姫

鏡…？

姫、鏡をのぞき込む。

するとそこには、自分ではないだれかの姿が映っている。

姫

なに、これ…。私じゃない…。

姫、鏡の中のだれかに声をかける。

姫

あなたは…だれ…？

少年、出てくる。

少年

あなたはだれ？

姫

私？私はこの町のお姫さま。あなたこそ、だれ？ひょっとして巨人？

少年

違うよ。僕は僕の町の王子さまだ。

そう。こことは違う町の王子さま…。そこはどんなところ？壁はある？巨人は？町の外に巨人はいるの？

少年、笑う。

姫、鏡を伏せる。

姫

それから私は、その「だれか」と話すようになりました。私たちはいろんな話をしました。それぞれが住む町のこと。家族のこと。巨人のこと…。何もかもがあやふやで、何もかもがはっきりしない、鏡を通した二人の触れ合い…。だけどこれだけははっきりしていました。私は、壁の向こうに行かなくてはならない…。でも、その方法はありませんでした。そうです。この小さな町から出る出口は、どこにもなかったのです。

ドシーン、ドシーン…。

姫

一気にお話ししてきましたが、皆さん、大丈夫ですか？ちゃんとついてきていますか？さて、ここでちょっと考えてみましょう。巨人って、だれだろう？壁ってなんだろう？みんなの周りに、巨人はいますか？みんなの周りに、壁はありますか？おしゃべりしてもいいですよ。おしゃべりをしながら、聞いてください。

私たちは巨人に迷惑していましたが、その一方で、巨人がいるおかげでも仲良く暮らしてもいました。いつも巨人と戦ったり、悪口を言ったり、それはそれで楽しい暮らしでした。…不思議ですね。嫌いな人のおかげで仲よくなるなんて。でも、とてもよくあることなんです。たぶん、必要なことなんです。

巨人って、いったいなんなのでしょう？巨人たちは、その巨大な足で、町から町をあっという間に移動します。いつでもどこにでも行けるから、足元など見るヒマありません。いつでもどこにでも行けるから、近くにいる人たちのことなんかどうでもいいのです。だってここが嫌なら、他に行けばいいのですから。だから巨人はとても気楽です。

では、そんな巨人の姿を見るにはどうしたらいいでしょう？…わかりますか？とても簡単なことです。あなた隣にいる人を知るためにするのと同じこと。ただ、触れ合えばいいのです。

ドシーン！

姫

それは、壁さえなければ、とても簡単なことなのです。

乳母、兵士、駆け込んでくる。

乳母

きゃーっ！きゃーっ！きゃーっ！

姫

…。

兵士

巨人よ！巨人がきたのよ！きゃーっ！

姫！お下がりにください！…ええい、巨人め！今日という今日はこの私が退治してくれよう。うりゃーっ！

ドシーン！

兵士 うわーっ！…む、無念…ガクッ。
乳母 あっさりやられてんじゃないわよ！

乳母、兵士を蹴りつける。

兵士 す、すまん！

乳母 姫さま、どうぞご安心くださいませ。今日こそあの巨人をやっつけてご覧
兵士 にいれますから。キャノン砲装備！
ラジャー！

兵士、乳母を抱えてキャノン砲の体勢になる。

姫 もういいわ。

二人 (聞こえてない) スタンバイ、ファイヤー！ビビビ…！

ドシーン！

二人 うわー！

乳母 なにやっつてんのよ、あんた！

兵士 お前がしつかりしないからだろ！

姫 ふたりともやめて！

乳母 姫さま…。

姫 あたしがやる。

乳母 なんですって！？

姫、巨人に向かって声をかける。

姫 おい、巨人！こっち向け！

乳母 姫さま！？

姫 そのでっかい足で、この壁壊してよ！おい！

乳母 なにをしているのです。危のうございますわ。お下がりにください！

姫 いいのよ、ばあや。

乳母 ばあやはやめて！

姫 巨人に、この壁を壊してもらおうの。

兵士 ……！

乳母 なんですって？

姫 壊してもらおうのよ。あたし、何日も何日も、この壁を越えようってがんば
乳母 ってみただけど、ダメだった。でも巨人なら、壊せるでしょ？

姫さま…。

兵士 何をバカなこと…！踏みつぶされてしまいますよ！ペチャンコのペッタン
乳母 コのペラペラになつてしまいますよ！

姫 それでもいい。

乳母 姫さま！

あだし、壁の向こう側を見てみたい。

乳母 (ぶっ倒れる) ヒャーッ…！姫さまがおかしくなつてしまわれたわ。外は
本当に恐ろしいところなのに。きつとあたしなんて、怖い人たちに囲まれ
て、あーんなことや、こーんなことをされちゃったりして…イヤーッ！

二人 ないない。

乳母 なによ！

兵士、姫を見て、

兵士 やつてみましょう、姫さま。ひよつとすると、何かが変わるかもしれませ
ん。

姫 …ありがとう。

二人、巨人に向かって、

二人 おーい！巨人！こつち向け！この壁ぶち壊して！お願い！（とかなんとか）

乳母、それを必死に止めて、

兵士 やめてください。姫さま、どうかそれだけは…！

乳母 もうよせ！

兵士 ……。

乳母 姫さまが出たいと言っているんだ。好きにさせてやるうじやないか。

兵士 そんな…。

姫 ばあや、分かつて。

二人、再び巨人の方を見て、

二人 おーい！巨人！こつち向け！この壁ぶち壊して！お願い！（とかなんとか）
乳母 やめなさい！

乳母、兵士の剣を自分に突きつける。

二人 …え？

乳母 あたしがどうなつてもいいの？

二人 …は？

乳母 あたしがどうなってもいいの？あたしの命が惜しかったら、さっさとその壁から離れなさい！

兵士 おい、お前…何を言ってる…。

乳母 早くしなさい！

兵士 それはいくら何でもムチャクチャだろう。

姫 どうしよう！？

兵士 は！？

姫 ばあやが…ばあやが死んじゃう！

兵士 姫さま落ち着いてください。

乳母 早くしなさい！

姫 早くして！

兵士 ええええっ！？

乳母 覚えておきなさい。人はね、大切なものを守るためだったら、何したっていいのよ。

兵士 ……。

乳母 さあ！

兵士 …分かりました。

兵士、壁から離れる。

乳母 それでいいわ。

ドシーン！

姫 わーっ！

乳母 姫さま！

乳母、姫をかばって、

心配することはありませんよ。私がおりますから。私がいる限り、姫さまを危ない目にはあわせません。私が必ず守って差し上げます。だから、心配しないで。あなたはここにいればいいの。

ばあや…。

兵士、持ってきたピコピコハンマーで乳母を殴る。

乳母 あ…。(気絶)

姫 ばあや！…ちよっと、なにしてるの！

兵士 ご心配なく。峰打ちです。

姫 峰打ちって…。

兵士 どうしますか、姫さま。今なら外に出られます。

姫 ……

兵士

そのかわり、外に出たらもう私たちは守ってあげることができません。この壁を越えるというのは、そういうことなのです。…たった一人で、外に出る覚悟がおありですか？

姫 ……

はい。たった一人で外に出て、あの巨人に立ち向かっていけますか？

兵士 ドシーン！ ドシーン！

姫 やめよう。

兵士 (ハンマーで殴る)

姫 逃げよう。

兵士 (ハンマーで殴る)

姫 忘れよう。

兵士 (ハンマーで殴る)

姫 だつて〜！

兵士 今さら逃げてんじゃない！

姫 だつて、(巨人は)でかいもん！ たった一人でなんて、奇跡でも起こんなきゃ無理だよ。

兵士、ため息をつく。

兵士

姫さま、最後にいいことを教えて差し上げます。もし、この世で二度と起こらないようなことを奇跡というのであれば、この世は奇跡でいっぱいです。「今、この時」は二度と来ないのでから。いつだって二度とない」今「を生きているのですから。

兵士、箱を出す。

姫 これ…。

兵士 開けてください。

姫 でも…。

兵士 今のあなたならできますよ。

姫、箱を開ける。

姫 鍵…。

兵士 この壁を越えるための、鍵です。

姫 どうして…？ 武器じゃなかったの？

兵士 ……行けば分かります。

姫 ……。

兵士
姫
兵士

ですが、先ほども言ったように、この先はあなた一人です。もう二度と、ここに戻ってくることはできません。
もう二度と…。
もう二度と…。

姫、ゆっくりと壁に向かっていく。
その時、乳母が目を覚ます。

乳母
兵士
兵士
乳母

ダメ！
お前…。
行っってはダメよ！外は恐ろしいものでいっぱいよー世界は悲しみでいっぱいなのよーそんなところに出て行って、幸せになんかなれっこないわ。
もうよせ…！
壁の中だけで生きて行って、何がいけないの。ここには悪いものは何も無い。悲しいことも苦しいことも何も無い。その何がいけないの？お願い、行かないで。私の側を離れないで！

姫、振り返る。

姫
乳母
姫
乳母
姫

ありがとう…。
…。
私のこと、だれよりも愛してくれて。
姫さま…。
私ね、この小さな町に暮らして、本当に幸せだった。そうだと思ってた。でもね、気がついたの。だから私は、哀しみを知らない。苦しみを知らない。寂しさというものがなんなのか、私は知らない。あなたが、なんで泣くのかも…。
…。

そう…。私は、人がどうして泣くのかを知らない。どうやって怒るのかを知らない。生きるってことを知らない。
…。

だから私は行きたいの。壁の向こうへ。壁がなくなるのは怖いけど、そうしないと分からないもんね。巨人が誰なのか。私が自分の姿を見せなきゃ、向こうの姿も分からないもんね。
姫さま…。

心配しないで。向こうに行っても、私はあなたを愛してる。
…。
…行っってこい。

姫、鍵を開ける。
静寂。

姫

そこには、巨人はいませんでした。ただ、分厚い壁に囲まれた、小さな町だけがたくさんありました。そしてその向こうには、やはり私たちと同じように、怯えた目をして外を見ている人たちがいました。振り返ると、私の住んでいた小さな町に、もう壁はありませんでした。

：そうです。ここはかつて、大きな国だったのです。ただ、私たちが忘れてしまっただけなのです。見えない壁に閉じこもって……。見えない巨人に怯えながら……。

きつと、壁の外を歩く私の姿は、彼らには巨人に見えることでしょうか。大きな足で、町から町を歩き回る恐ろしい巨人……。でも、そうではないと、だれに言えるでしょうか？私のこの手が、私自身のこの足が、どこかの町を踏みつぶさないとだれに言えるでしょうか。小さな家族を壊さないと、だれに言えるでしょうか。

この壁をすべてなくしたら、ここは元通り大きな国になるのかもしれない。でもそれは、とても難しいことのような気がしています。だから私は、もう少し、歩いてみようと思います。出口を探している人たちに、この鍵を渡しながら。小さな絆を渡しながら。そうしたらきっと、新しい国が、生まれるような気がしています。

姫、客席を向いて、

姫

こんにちは、みなさん。私の名前は、メグミです。タカノメグミです！

音楽

く幕く